



# 南の躍動

令和7年度 第4号

奄美のよさを生かした魅力・活力ある教育の推進

大島教育事務所 令和8年1月20日



## 特権を生かし責任を果たす

所長 別枝 昌仁

12月開催の日本復帰記念大島地区中学校弁論・ショートスピーチ大会では、12市町村の代表が、現代的・普遍的なテーマから奄美ならではのテーマまで、質の高い発表を行いました。優れた発表者としての姿だけでなく、登壇者への返礼や拍手を含め、「良い聞き手」としての姿にも感心しました。各学校における日々の教育活動の成果が表れており、指導に当たった先生方にとっても、達成感や喜びを感じる時間になったことと思います。

学校は、教職員にとって自らの役割を果たし、やりがいを感じる場です。教諭等の場合、その中心にあるのは毎時間の授業でしょう。荻谷剛彦氏<sup>(注)</sup>が述べるように、教壇に立つ者は教室において学習者の思考の方向性を導く「強大な特権」を与えられています。そしてこの特権は、教える側にやりがいをもたらす一方で、児童生徒の学びに影響を与えるという責任を伴います。

これまで、児童生徒が生き生きと学びに向かう授業や、主体的に知識・技能を活用しながら思考・判断・表現する力を育てようとする授業を見る機会がいくつもありました。教える側の特権と責任を意識し、授業計画や発問の工夫、効果的な働き掛けを通して、児童生徒の成長を促している先生方の姿は頼もしいものです。

教諭等以外の職にも固有の特権と責任があります。例えば、養護教諭には心身の健康の維持・増進、医療的判断の裁量、栄養教諭には食育と栄養管理、事務職員には公金・文書管理、用務員等には設備管理など。いずれも学校の安全と信頼を支える上で重要であり、欠かすことはできません。学校訪問では、教育環境の整備状況や掲示物等が発するメッセージ、教職員と児童生徒の表情や言動等から、教職員一人一人の思いや仕事ぶりに思いを巡らせています。その中で、素敵な雰囲気のある学校ほど、個々の教職員が各々の特権と責任に向き合っているのを感じます。また、こうした教職員への感謝の気持ちを表す管理職の言葉を聞き、嬉しく思うこともあります。

どの職であっても、与えられた特権を責任と一体のものとして生かすことが、児童生徒の成長を支え、やりがいを感じることに繋がります。同様のことは行政機関の従事者にとっても当てはまります。それぞれの立場で、日々の業務がその特権を生かしたものであるか、それを改めて振り返り、年度末の教育活動の仕上げと、次年度に向けた準備へとつなげていきたいものです。

<sup>(注)</sup> 大村はま/荻谷剛彦・夏子「教えることの復権」筑摩書房、2003

## 祖国復帰を果たした先輩の思いを受け継いで

12月11日、宇検村生涯学習センター「元気の出る館」において、日本復帰記念第38回大島地区弁論・ショートスピーチ大会を開催しました。本大会は、祖国復帰を果たした先人の思いの継承と、将来の奄美群島を担い国際社会で活躍する人材の育成を願い、52年にわたり受け継がれてきた歴史と伝統ある大会です。各市町村の代表32人が出場し、「わたしの郷土・奄美」「わたしの中学校生活」「わたしの生き方」「国際交流・国際理解」をテーマとして、自身の体験を基に考えを述べました。

ショートスピーチの部最優秀賞の大山仁奈さんは、夢であった両国国技館での相撲の全国大会に「土俵に女性は上がれない」というしきたりを理由に出場できなかった経験から、「平等な社会をつくるのが私の夢だ」と語りました。弁論の部最優秀賞の泉花蓮さんは、亡くなる前の母に何気なく発してしまっ言葉振り返り、「後悔しないように生きていますか」と問い掛けました。一人一人が自分の体験を見つめて紡いだ言葉に、心を動かされる大会となりました。今回は、令和9年度に知名町で開催される予定です。

	ショートスピーチの部	弁論の部
最優秀賞	大山 仁奈 (奄美市立笠利中)	泉 花蓮 (和泊町立和泊中)
優秀賞	辺木 凧沙 (龍郷町立龍北中) 井 凜音 (徳之島町立亀津中)	林 梨乃 (奄美市立東城中) 中原 芽唯 (伊仙町立面縄中)



## 子供を主語にした学校づくり (人権教育)

○ 人権尊重の視点を踏まえた授業づくり  
子供が安心感や自信をもち、互いのよさを認め合い、支え合う授業を積み重ねていくことで、子供の豊かな人権感覚が育まれるとともに、自尊感情の高まりにもつながります。

【授業づくりの視点】(参考 令和7年度版人権教育研修資料、県教育委員会、2025)

- 1 児童生徒一人一人の「学びたい」という思いや、よりよい自分になるようとする姿を捉える。
- 2 全ての児童生徒が安心して学び、学習内容の定着が図られるためにはどうしたらよいかを考える。
- 3 全ての児童生徒が互いの思いや願いを大事にし、授業を通して高め合う雰囲気づくりをする。
- 4 全ての児童生徒にとってよりよい生き方につながる授業の指導内容・方法の工夫・改善を進める。

○ 子供を主語にした学校づくり (参考 木村泰子「校内研修シリーズ No.158」NITS、2024)

「子供を育てる学校」から「子供が育つ学校」へと学校観を転換するとともに、学校は「ある」ものではなく「つくる」ものと捉え、児童生徒・保護者・教職員が学校づくりに参画する意識をもつことが大切です。まずは、「なぜ子供は学校に来るのか」について考えてみましょう。

【学校づくりの視点】

- 1 「子供の事実」から問い直す。
- 2 子供の学習権を保証する。
- 3 「学校観」を転換する。
- 4 全ての人が学校をつくる当事者となる。
- 5 学校の中の「当たり前」を問い直す。
- 6 「主語は子供」の学校づくりを問い続ける。

## 瀬戸内町 ICTとAIを活用した学びの広がり

瀬戸内町は、鹿児島県で唯一のGoogle for Educationパートナー自治体として、ICT教育の推進を目的に、教職員向けだけでなく児童生徒向けの研修も実施しています。児童生徒は、テーマに沿ったプレゼンテーションを作成し、全国規模の大会で発表するなど貴重な経験を積んでいます。さらに、AIの活用による英語教育強化事業として、AI搭載のスピーキング練習機能の活用や、他国の学校とのオンライン交流にも取り組んでいます。オンライン交流では、英語やジェスチャーを工夫しながら思いを伝えようとする姿が見られ、「次回は更に会話を広げたい」という声が聞かれるなど、英語学習への意欲の高まりが伺えます。



## 徳之島町 総合的な学習の時間を核とした郷土教育「徳之島学」

徳之島町では、「島われんきゃ<sup>(注)</sup>教育ビジョン」に基づき、総合的な学習の時間を核とした郷土教育「徳之島学」のカリキュラム化を進めています。本取組は、地域の歴史・文化、自然・環境、交流・体験、探究活動の4領域を系統的に位置付け、持続可能で探究的な学びの実現を目指すものです。右の「徳之島学へのいざない」は、徳之島及び徳之島町の自然や民族文化、歴史に関する研究成果を踏まえ、その要点を分かりやすく紹介することを目的に作成されました。「徳之島学」は、町内全校で教育課程への位置付けや授業実践が進められており、小中連携の取組も広がっています。<sup>(注)</sup> 徳之島の方言で「子供」や「子供たち」を意味する。



## 天城町 海外派遣事業・まちなか留学を核とした国際理解教育

天城町では、「世界雄飛」「島担うづくり」を教育の柱に据え、中学生を対象とした国際理解教育を進めています。「海外派遣事業」では、4人がアメリカ合衆国でのホームステイや現地校との交流を体験し、学んだ英語を実生活で使う中で、主体的に行動する力を育みました。また、沖縄県で実施した「まちなか留学」には10人が参加し、外国人家庭での生活体験や英語での会話を通して、英語で伝える楽しさを実感し、自信を深める姿が見られました。参加生徒は町内小学生を対象に報告会を行い、体験を言語化することで学びを深めるとともに、異学年交流にもつなげています。これらの取組を通して、広い視野をもち、ふるさと天城町を誇りに思う子供の育成を目指しています。



大島地区12市町村の先生方に、それぞれの日常生活を紹介していただきました。右の二次元コードから大島教育事務所Webサイトにアクセスして「奄美群島で働く先生たち」を御覧ください。

【タイトル横の写真】キノコそっくりの姿が特徴「キイレツチトリモチ」(龍郷町教育委員会提供)

